「父の勝手な行動で命拾いをしました」

太田　正子　（７５歳）

高松大空襲の日の話です。その日は一番上の兄が盲腸の手術をして、市内の病院に入院していました。父は兵隊で高松空港の守りに就かされていましたが、非番で病院へ来ていました。大爆音と共に B29 の大編隊から爆弾が霰の様に落ちて来たそうです。

病院の婦長から「全員が揃って一緒に逃げるので勝手な行動をしない様に。」と強く言われたそうですが、父は「そんな事を待っていたのでは死んでしまう。」と言って兄を抱き、母が生後１か月半の私を抱いて逃げたそうです。少し走り、父が後ろを振り向いた時は病院や付近の建物はまったく見えず一面が火の海でした。その時の爆撃で高松市は 80%余りが焼野原になりました。また 2 番目の兄は祖母と家の横にいると北の空（高松方面）が空一面、花火のナイアガラの滝の様だったそうです。父が後ろを振り返った理由はいかにも父らしいものでした。それは新品の自転車を病院の入口に置いていたので未練があったそうです。

父は軍隊で身体を悪くし、戦後家の農業も余り手伝う事もなく、横になっているか入院しているかでした。大正 6 年生まれの父が 64 歳まで生きましたが大変な医療費が必要でした。苦労したのに母は「お父さんはバクチをした訳でもなく、女遊びをした訳でもない、戦争が悪い」と戦争や戦前の教育を鋭く非難していま

した。「高い空の上を音もなく、飛んでくるB29に松ヤニの油や竹ヤリ訓練でなんで勝てますか、子供でも判る事じゃ」と小さい頃は日本とアメリカの違い等々をよく話してくれました。

私も物忘れの多い年齢になりましたが母の話だけははっきりと思い出せます。戦争が無ければ母の苦労もなかったのです。祖父の血を受け継いで共産党や色々な活動に熱心だった長兄も51歳で亡くなりました。その時の母の言葉です。「あの時 B29 に殺されていたと思えば……今日まで生きていてくれてよかった。」でした。

余り知られていませんが特攻隊の訓練基地は香川県にもありました。今、その場所は宅間電波高から香川高専となり、若い人達が学んでいます。この若者達を戦場に送り出さない為にも「戦争反対、戦争絶対反対」これにつきます。